

信濃奇區一覽

三

和書門			
二九	二七	一	類
函	架	冊	五

內閣文庫	和書
二九一七一	冊
五	架
一七四函	冊
一九	架

內閣文庫	番號	和 29171
	冊數	5 (3)
	函號	174 219

地五六

内一〇九五〇號



Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



松原月
寄
御
書
大
正
十
一
年



大
正
十
一
年
十
一
月
十
日
寄
御
書
大
正
十
一
年

古
於
寄
御
書
大
正
十
一
年



信濃奇區

松原湖

鑄馬

擗岩

香爐岩

皓月輪

魚名藥物

布引山

蝦蟇園

婆良小屋



一覽卷之三 目錄

作部

古燈臺

紫雲山什貨

古陶器

宝林山什貨

碓氷紅葉

魚石

下之糸古物

王塚

立科山

内一〇九五〇號

古鈴

玄三鬚

蛇石

相生松

浅間山

駒形石

彼岸清水

農夫殊行

小縣郡之部

四阿山

國分寺埋木

鳴石

虚空藏山

大工噓蚘蛇

獅子踊

感馬

魚骨石

出浦

鳴巢

佛岩

柳草



信濃奇画一覽卷之三

佐久郡之部

松原

松原村小島湖の湖あり大湖尾長湖と云大湖の東北に諏訪上下の村あり別名葎島
 山真光寺 神主あ家あり社領ハ三十石一村にま田あり大湖ハ深き所五十尋と云り魚
 鱈ハ之を新のこりしハ近年鯉を教つ鮒ハ大者有落雲して風多き日ハ必浮ひてらん申
 七月御射山祭の時山上より臨めハ大ききハ先ハ游ハ小きハ少ハたれて思ふはゆりてハ大
 鮒ハ長さ二間よりと云ハ又ハ三丈許と云其間二百間程走れハ詳ハ初ハ尾長湖ハ
 深きハ十五尋と云り茲ハも大魚有と云も出多ハ稀申てらん者少又湖中ハ三壇
 を築て上に石塔婆を建てる此ハ昔天降してこれハ二壇ハ下の二壇ハ女人往
 古來の港ありこと今ハ如くある所ハ物あり

松原
西湖

大湖
尾長湖

其外ニ

重湖

御所山湖

白兒ウミ

カツハウミ

ヘミ池

ヒルモ池等

神領ノ内ニ有

東



古鈴



四寸二寸

徑六寸



重六百目

入沢村諏訪の神祠に武存
佐久三社の内英田神社の文
字多く書つけたる古鈴あり
先年其地の田中より掘出
と云古色愛之へ

銅馬

白田下の諏訪の神祠に一箇の銅馬あり是ハ元和の頃此里に相沢
半右衛門と云者あり其子長五郎といへり相沢と云地の古壘より
田植の男女十二人の像并牛馬朱耜鎌馬鉄杵を實出せし事も
傳物あり其中の馬と云は納りしと云傳ふ式又これと
鑑定して凡十年の遺物と稱せり

紫雲山什貨



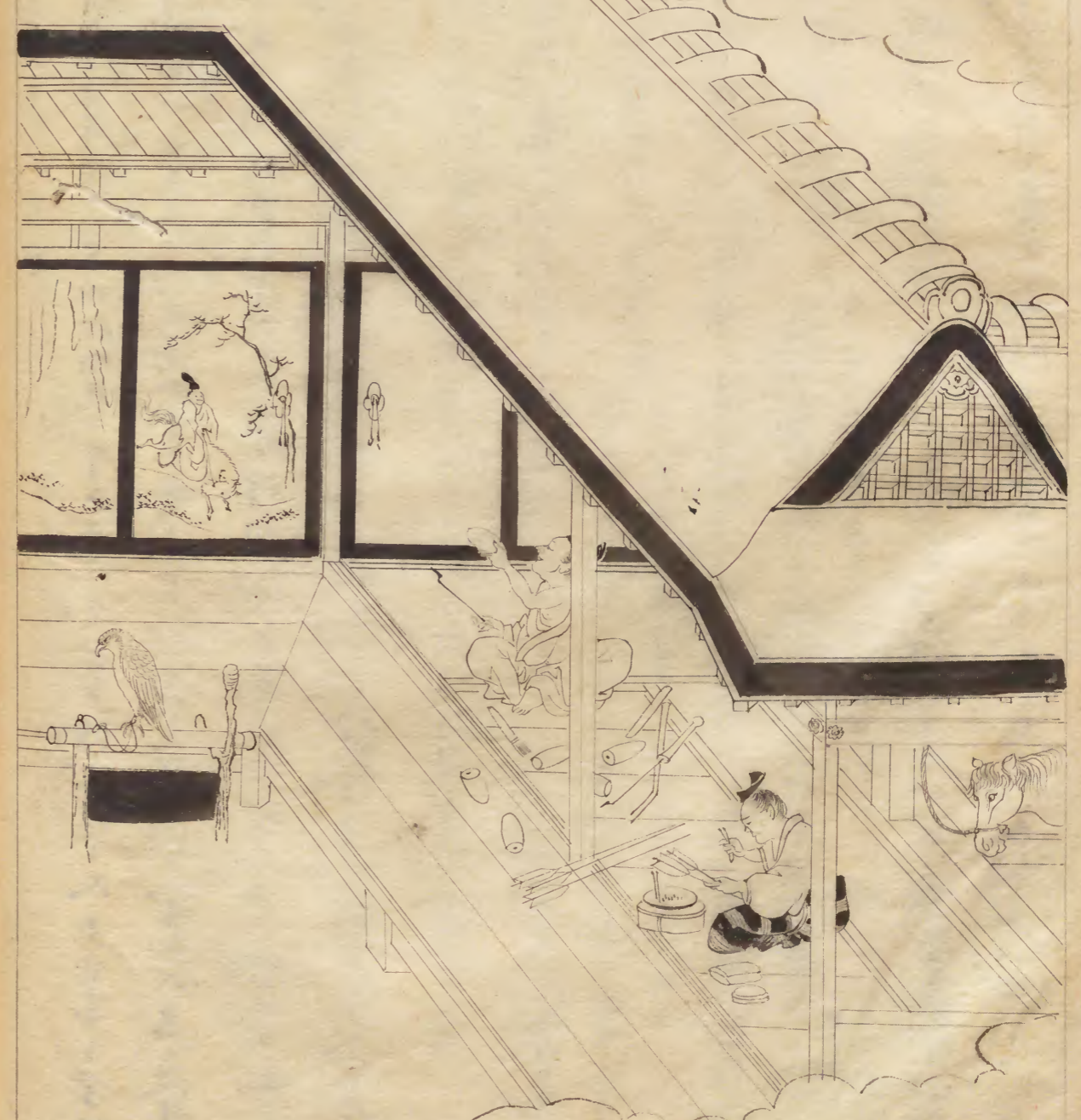
豎三寸八分
横六寸六分

野沢村金臺寺ハ弘安二年の草創にして元祖一過上人初開の地あり

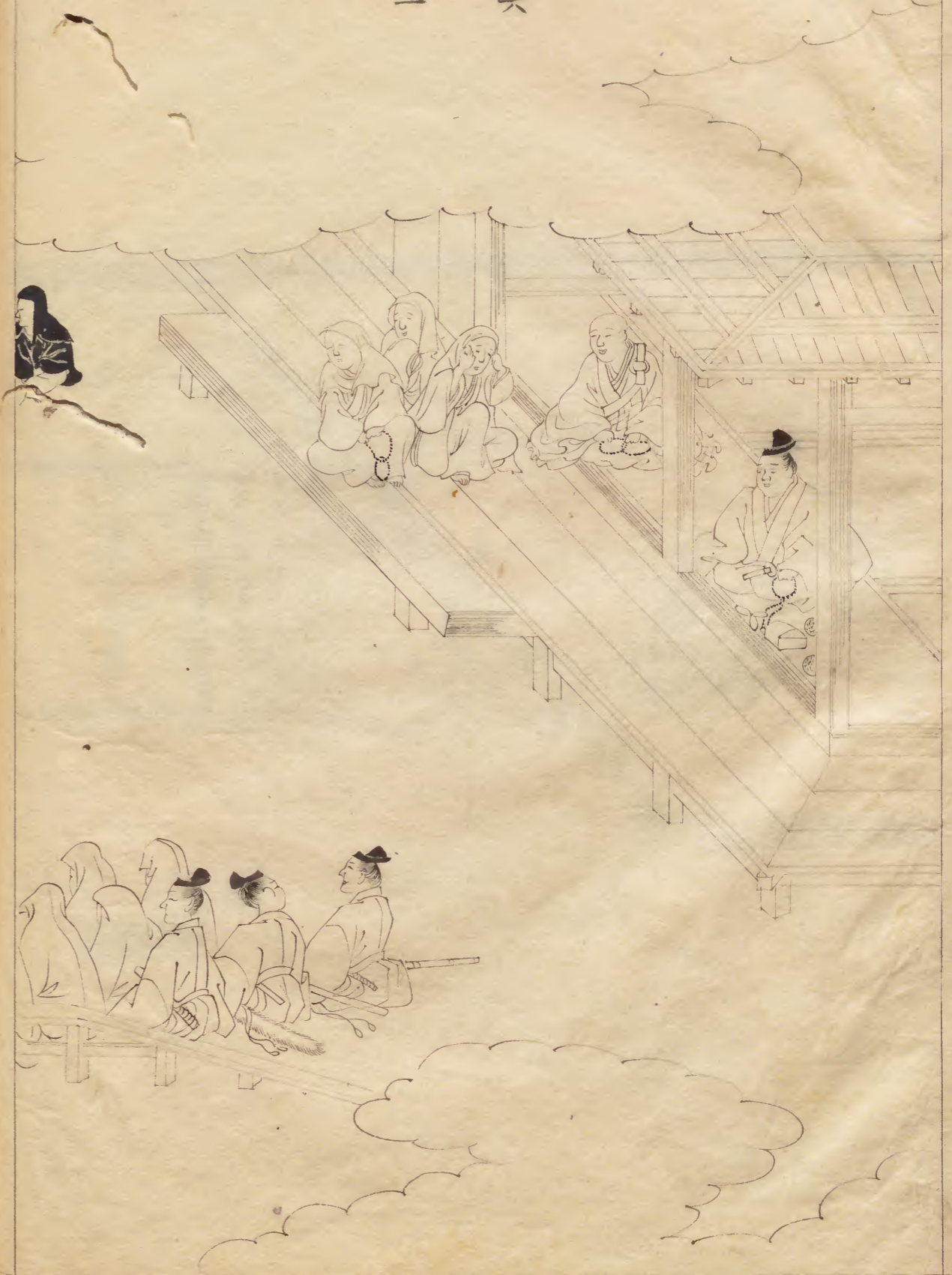
上人ハ伊豫國河野七郎通廣二男始松樹丸と号す其を名を隨縁坊と改天台宗を學後
法然上人の直弟西山善恵坊門流向西寺の聖達上人に達を念仏門に入名を知真と改建治
元年九月より百日間地母總望の奉参觀神勅の頌と受て一遍と号し替く衆生を勸て諸
國遊行の次で大陽正八幡宮七百餘祀満ちて秋束帛の神影現はれ九聲の十念を授けし
く信心堅固より十四年のる遊行正色二年八月廿五日松樹在兵庫北親善堂入寂五十歳

少系江に建治二年遊行一過上人信伴僧行て踊躍念仏を奉とあり今今の野沢寺に在り
又此部は鉦鉢物と云ふ四流あり其の地は信伴僧の信と云ふ一箇の金幣を造りて其の傳も代
傳て遊行の什宝也其一箇ハ今此寺有
其の年中武田村を造せし鉦徑六寸四分ハ什宝と同じ建慶二年
三月二日と彫つけ有れしハ磬の内ありし
真教和尚の筆の御詞傳十巻亦在野澤道場より今中野二巻當寺の什物と成り有卷初ハ白田二
寺に在りし也其傳傳と云ふ野澤道場より今中野二巻當寺の什物と成り有卷初ハ白田二

繪詞傳第二卷
伴野野沢の城中にて
元祖一遍上人
踊躍念佛の圖



其二



好古小録曰藤沢
道場遊行録記
十卷畫隆光詞
二世遊行云云

禹家系譜云

隆光 栗田口法眼
氏部郷



成 阿 久 行 行

同卷中元祖一遍上人之歌二首
二世他阿上人之書模寫

也

か し ち む よ 建 人 八
か 日 山 ぐ の 友 誼

も し 清 下 七 十 九

也 一 逆 一 紀 世 乃

中 の す み 免 一 行

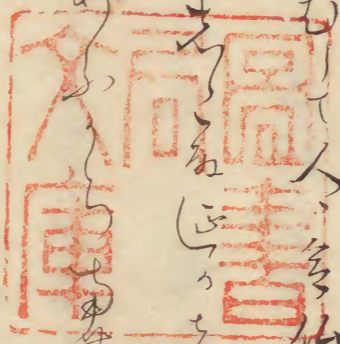
ま 一 一 海 一 一 行 一 一 成

二世上人ヨリ當寺ノ住持へ
奉訪ノ書翰一通有具文云曰

鑑念ハミヒクシキサモ
ミヤテニレモ道場ハ
神ノ開クニミヤカニ
ク来レハハミヤカニ
今レハハミヤカニ
列ノミヤカニ
手城ノミヤカニ
ミヤカニ
ミヤカニ

さて其所小念仏往生銭祈ふ人々を聖と崇
むる比をふ心をも念仏の位心をも踊
躍秘あることありけり此同行もに夢
とて念佛一杭をきくそゆき踊るを
よの随在し聞人偈作し金磬をみき清き世
て空の事なり 抄踊念仏ハ空也上人或ハ市分
或ハに來てけり行けり
古今著聞集曰念仏三昧法も事ハ上古六稀あり天
度より東空也之をきりて道場系路を行か
人々道俗男女のまめ稱名をすなり
今此邊踊念仏と名付けて大鼓を打 鉦を鳴し
因縁して唱ふの礼なり

これのソル 在ミヤカニ
ミヤカニ
ミヤカニ
ミヤカニ
ミヤカニ
ミヤカニ
ミヤカニ
ミヤカニ
ミヤカニ
ミヤカニ

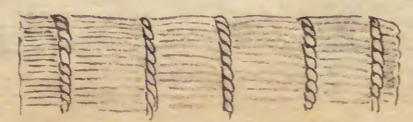
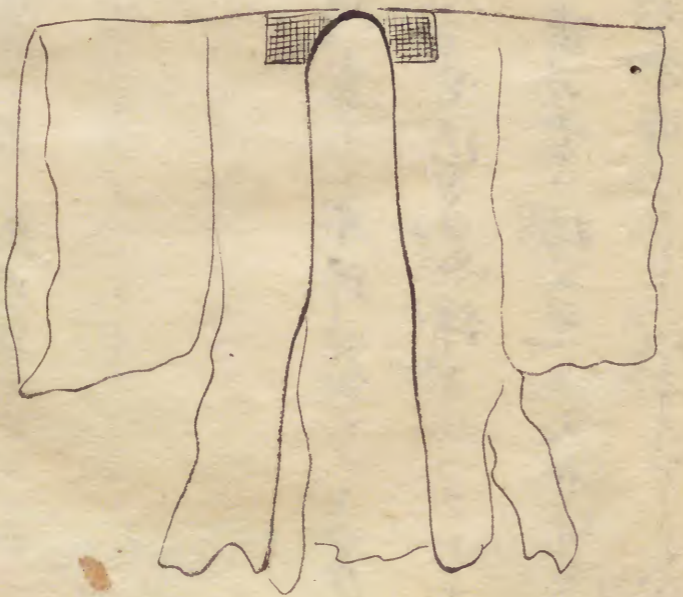


みりやう
代に伝はる

神行法師の

アミコ
編衣

元祖
遊行
上人
遺物



好古目錄云仙家ニアミ衣ト云服アリ麻絲ヲ以編
タル如ク裁縫ハ十徳ト同之但共異ナル所ハ肩又キト
襟、長キトノミ○和名鈔引唐韻云襪ワイ音催和名
未知古呂毛 袈服也
○河海鈔云服者着衣也○拾遺和哥集 袈衣織也。

櫛岩

大庄の里より八丁より川を流を伝へて十丁脚と云あり松山の麓巖窟北下より清泉涌れくはの流れもなほより土層あり此山は後より櫛岩なる岩三層有り其間立尖り下の一層は窟下の土穿て岩窟なる所数箇あり何れも櫛岩の形其形は徑二間余の深き一丈より一の窟あり此内は這入仰せしむるは櫛岩の本葉の形あり度々葉の可きと覺しきもの多し依て可きと名としふあは頂形は西く如く形如し葉も一とくとも切なみのあはれは櫛岩の地性古く平地にて木の茂る葉もあはれは山にありて度々土穿て流すに岩名とありて一三層あり多びくわは岩多れは変異の大小ありしに如れあり

古陶器

市川氏の里より島より坂山は物今の花瓶の如くもなほも忌免ありし

市川氏鋤圃得陶器其制甚古雅也而其埏埴之年代不可得知就序乞銘曰顯晦有数用舍待人草誰所愛今我以珍

明和丁亥秋

曲肱道人書

此器安永中天神林村の内下香呂と云地

り穿出は核は並ハ居すく豎れハ款又水

と入れはよく居水満れハ倒了故ハ或人量と家

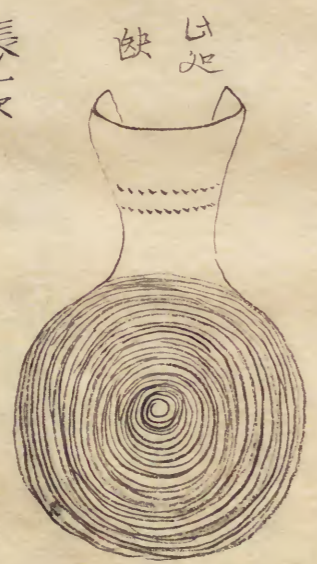
語ハ出る宥坐の器ありといハ熊窪住と云

里より此器ハ似しと定出せり按古代の

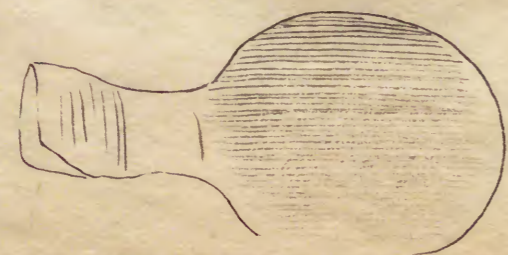
陶器口廣く底の丸きハ皆忌免あり

一口の廣きハ上古の酒ハ糟交りて今の除醴醜と云もの類と入れはあり後漢土の製表を傳へて清酒とハ成り

素焼しそ形意あり中ハ米と入て有し



白田相沢邦義藏



四寸一分

六寸三分

祭神 一ハヒコヲマニエオキ
万葉ノ 齊戸平並坐置イハヒヘ トコヘ スエ忌氣を床坐イハヒヘ コイハヒワリスア居て 齊戸平忌氣居イハヒヘ コイハヒワリスア

忌淨イミヨメて醸カせし酒サケを食タむる居イて 神カミを祠ミヤれらるる 見久老 區志考

天明元年上塚原村一民一邱と實ア一平石ありと實ア一其下ア三又四方を

石イシも周イ中央ナカに底ソコ凡ソト三ミの隅カドに壺ヒツ一ツ宛ア有アて 各オノオノ蓋フタ有一ヒト方カタ六ム枚マ重オモね

あり何れも色イロ黒クく素ソ焼ヤキのありアりキりノぬル

梅ウメは地チ上古コノの舟フネ揚アゲりては蓋フタハ即ス上古コノの忌氣イミあり

神事カミコト并ナヒ談タ曰イハ古コノハ宮ミヤ殿テンと云イハれル神カミを多オホく為ナす他

と云イハれルて多オホく為ナす舟フネ揚アゲとゆイふことコト刑ナガと云イハれル後ノチ社ヤ

揚アゲり中ナカに之ノハ宮ミヤ殿テンは代ヤりノの代ヤりノ代ヤりノ

なり後ノチに神カミ室ムロ及ツ忌氣イミをイるル為ナす宮ミヤ殿テンと云イハれル

後ノチに宮ミヤ殿テンと社ヤとイふル為ナすル故ユにシテハ社ヤとイふル



土井ツツに居イるル我ワらノ社ヤと云イハれル又マ大オホ祠ミヤと云イハれル祠ミヤと云イハれル

本ホ神カミのミ神カミ庫クラ此コノ云イハれル保ホ護ゴ云イハれル此コノ又マ社ヤのミ神カミ庫クラをイるル

無ム出デと入イるル是コノ目メ小コノ者モノと云イハれル社ヤと云イハれル後ノチにシテハ社ヤと云イハれル

祠ミヤと思オモひル也ナリと云イハれル也ナリと云イハれル也ナリと云イハれル

蛇石

山田ヤマタの里サトある宗ムネ像ゾウ羽ハ神カミの神カミ体タテハ石イシ之ノ古コノ家イヘ雜シ池イケハ曰イハ建タ久ク八ハチ年ネン二ニ月ゲツ将シヤウ軍クン家ケ小コノ書シヤ上ウヘ

信濃シノノ国クニ佐サ久ク郡クニ在ア城シヤウ之ノ園エン祀ヒ小コノ田タのミ神カミ池イケ之ノ城シヤウ主ヌシ是コノ浮ウキ孫ムスヒ也ナリ在ア城シヤウ本ホ丸マル東トウ西セイ二ニ三サン十ジュウ

間マ二ニ尺シヤク南ナン北ペキ二ニ町チヤウ十ジュウ四シ間カン余ヨリ大オホ門カド五イ所トコロ平ヘイ城シヤウ掛カケ五イ所トコロ城シヤウ中ナカ蛇ヘビ石イシ有ア神カミ代ヤのミ昔ムカシ出デ雲クモ園エン

之ノ志シ多オホ矣ナリ山ヤマのミ八ハチ岐キのミ大オホ蛇ヘビと云イハれル是コノ蓋フタ皆オホ言コトのミ退ヒ治シ也ナリ大オホ蛇ヘビのミ一ヒト念ネンをイるル也ナリ

之ノ長ナガ一ヒト丈シヤウ横ヨコ三サン尺シヤク高タカ四シ尺シヤク八ハチ寸サン家イヘ臣シヤウ塔トウ并ナヒ惣ソウ吉キチ舟フネ京キヤウ在ア助サケ佐サ也ナリ

石イシ外ソト中ナカ三サン十ジュウ新ニヤウ也ナリ又マ布フ丈シヤウ天テン除ジ地チ十ジュウ二ニ石シヤク程テイ

とも有れハ往古ハ亦夫天小高し〜名ハ石手鐘多し形長く成れハ靈氣之を祀
と長く造りて〜と 蓋し山長と三河許〜 嶺石長とれハ前後を二尺余造り
この頂や神祇道の官小折して一村の産物多し 宗像大御神と崇む後ハ石質長と
といひ傳へ三月八月初の巳の日を以て 創祭の辰とす

按小古ハ蛇沃と呼ハ蛇石の有と以て号山田と号も 山岐の大蛇の創とす文字を
山田の改り〜や今ハあらちよ〜と 蜻蛉と云兼名苑云蛇之最大也又岬蛇と云岬ハ
和名ニキキマテ別物なれも通して大蛇の名とす

香爐岩

香爐村 瀨加流山の觀音堂ハ峭壁の下小く別當ハ明泉寺と云瀨加ハ水の梵治言岩
より水の海響と以て瀨加流山明泉寺觀音院と号とや言サ世土の碧巖列屏ハ
〜〜東の嶺とて又五丈許孤立して峙岩ありと云角岩と名つく何れハ頂や

〜〜松峽仙人と〜〜の此巖の頂より香を燒〜〜香爐岩も呼〜〜也
其より山と仙人、嵩と稱先之祿の以板の丸木自創水て六角岩の頂より觀音堂と
傍より松小縁ハ扇富て岩の頂より至て是れハ一箇の岩石物を蓋し〜〜取除てと云ん
〜〜何方より白き鳥飛來して妨る故ハ恐怖して之の板を〜〜ハ
〜〜又其里の農夫その辺より落物の香炉のひき物を拾ひ得〜〜香小炉の隅
〜〜火入とも或の香き 烟香の狂歌者來りて〜〜ハ体ハ〜〜と
〜〜と請主諾〜〜 高瀬と号〜〜商人販て〜〜花物をハ富山橋並枝高と
〜〜其後〜〜と云何〜〜物と云や〜〜

安養寺什寶

安原村寶林山安養寺ハ法燈團師の草創也 航海帰朝の後ある年と云創
一開山ハ二世智鑑禪師と云 笈領記ハ永享十二年 且利持氏季子永壽王凡信

皓月輪

岩村田より山田井の間金井原より如く徑十五間許太々二尺余圓く艸の長せる地あり
是を皓月の輪と云ふ俗に神の馬寄所と云ふ或云ふ大逆物の處とを曰村上判
五代基國ハ頼朝公射術の師より頼朝公此處を大逆物所行有し時的所と一圓相
あり頼朝公馬を射りて梶原景時所也行平島山重忠和由少中義盛以上云うて
射之其帝基國指南の徑より依之基國に赤南牧西牧より五千町を賜ふ彼の處を
光月の馬場と云ふ
今光月の輪
と云ふこと云ふ

或云安南問答少許射秘抄の序より多賀平後を聞吉も大逆物の鏡念実相公の時
始より由又云三浦公上院今那須望の孤狩より始ると云流あり又山田より逆の間に大
窪より少許の處より徑七八間許して圓く是を別と云ふ地あり赤南牧を經府より江
尾の間より山一丁より毎の半葉の長さを所ありと名を抄書に食し之と云傳ふ

と同日の流ありと云ふ

月輪原上草萋々 何歳盤旋碧玉蹄

春草魚侵馬行跡 于今歴々自成蹊

碓氷紅葉

碓氷嶺熊野の神祠の辺楓樹多し一葉秋の紅葉盛ふ山に綿繡と云ふ如
く實は女奴の衣色に云ふ也又前より山に綿繡と云ふ如く
山の名は山行をたえぬ山行といふ所の名は山行といふ所
山の名は山行をたえぬ山行といふ所の名は山行といふ所

下葉多しと云ふは山行をたえぬ山行といふ所の名は山行といふ所
時行卿

浅間山

古茅の海原の烟をぬき古茅集ふ雲をぬき海原の山のあまのこゝろを

とてやまのしるを始とて山つゆ煙とちのりよきハ大焼をし烟絶ると云ハ
硫黄の糸地中より出て大焼なり此を釜と云づく巡一里と云ふ玉河の大焼なり
穴深き底と云ふ凡日本記の白風十四年三月信濃國灰降草木枯と云ふ其時
此山大焼ありしありし

中古記云天治元年九月五日九中辨長忠於陣頭談云近日上野國進解狀
云國中有高山稱麻間峯而後治曆間峯中細煙出來其後微々也後
今年七月廿日猛火燒山巔其烟屬天沙磔滿國煨燼積庭國內田畠
依之已以滅此一國之嘆未有如此事依希有之怪所記置也云
中古記
中御門石

大臣藤原宗忠之
家記也 大焼のり其後さう小記なり或云曰大永七年四

月大焼又享祿四年十二月廿二日大雪降つり六七日大焼を林麓二里程の石
の降り雨のし灰の降り三十里及ふ大雨を焼石を押し出さし林麓の村ま

流失をとり了今曠原ハ森何と燒石其時の漂出る一正徳元年二月廿六日大焼
震動半日しと止む灰の降り一寸享保八年七月廿日大焼何事なり同十四年十月
廿日又大焼云此山煙絶穴埋りし平地と云ふなり正徳三年北春り烟にら
のりり度く一五月廿日大煙立中空小綿を垂り知し六月九日廿九日又
大山烟よりとも音あり七月廿日大水あり五月廿日大煙天を覆ハ
震る百里及ひ八日山破れ泥多突突せしハ古今未曾有なり

漫游水草吾妻川アカツマ記其略曰天明癸卯七月庚寅朔淺間山陽
焰暴發五日甲午火焚山巔七日丙申大焚震動雷激沙土雨二十五
百里外山南數百里暗黒如夜沙雨而深三尺歟明丁酉山巔怒破泥
水突發巨石奔騰其泥熱沸流入吾妻川居民衝沒瞬息之間掃
壑被災之地自吾妻郡徑群馬名和二郡至武藏中瀬馬以野聞

浅间山



葛亭誠季郷

善能多の

浅間山

山

高小

うすむ

長

葛九光栄郷

浅間山

山

山

山

山



流没ノ民戸凡一千八百只不下二千両所廣狭二百餘里忽為赤地云々

天治元年より天明三年の間天百年かく大焼の毎度上野へ砂降事ハ山つね西風

はよく烟東へうひくゆゑあり信濃に榎井はうり碓井嶺砂降を餘を難

無名薬

浅間山中の日陰に石名の薬物を生じ

石南花の細根の赤く丸き物を生

次より長くて空中に至り土上より五

月に至れば腐壞は味ひ苦耳にて

積聚は妙あり風邪は二斤煎一用

いて速に瘧散を多く用ひて狂顛す

其外にも功驗有るものと人試これハ

其色 黄黒

土中 始取



初はとくしうえ末名同なり肉苓石土芋信濃人考ふと名つくとし其名を
よも者もよはお油る山中に得て他山へ生ずる形は様なり

亀石

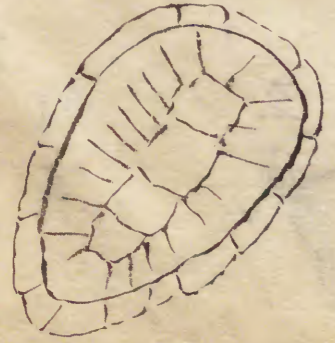
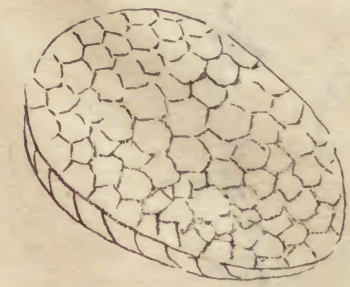
小諸の東の松の並木をわく松と名つく其跡は女川とよ小流あり暴雨あつう漫水の後

土石勒きしうづ龜甲に似る石あり色黒ありて両面は文理あまや鮮なりハ少く第一い低く

切首尾四足あり似像の物あり今ハ希く出る文理鮮なりハ少く第一低く

更級郡赤池にも亀石と名を先ハ節言く背も言し是色ヤ一尺よりあり

とく石質同しハ茲小図をみて女川の石



折文 不滿尺 藏六自天然
蓮葉 下來後 歲月知幾千

江戸 行言

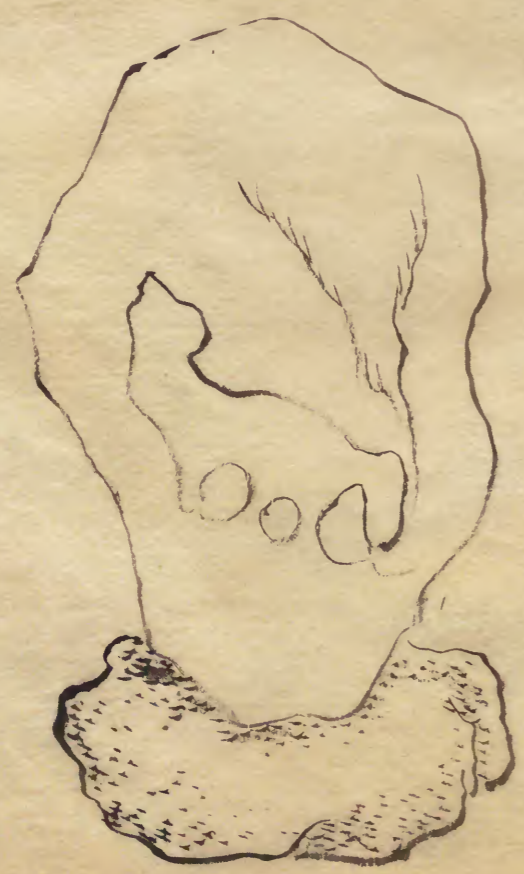
あふりて沖もさやわらぬきりぬるをばしるは 至誠

うはの代と 種もあまやふやと 茨てまのりし 本む 宣風

駒形石

石嶺の北に石嶺と十里あり往古延喜の官道小縣郡多古の驛より佐久郡沼
辺より古道より之稱の以土人の差にりる石ありをさす市より穿出と云
石面云より言く馬の形なり今地龜堂の庭より至る駒形石と云小諸海徳院
先住観禪和尚賛

石嶺 石馬 圓質 靜菴
維此神馬 萬古獨雄
原是步景 何翅追風
昔出漢延 自扶棗東
爾未寥潤 影迹久空
浅山之下 石嶺之陸
堅砥隆起 再現雄姿
天劃神鏤 胡然作奇
郷人摹搭 遐邇珍之
吾觀其圖 驗氣難羈
千里逸足 名之與馳



額岩寺
若



布引山
釋尊寺
圓通閣



布引山

布引山ハ望月の山馬場の北に當りて林麓に千隈の流を平石壁峭然として千仞の崖に如く小峰あり岩壁亦白き布ありて布を引く如し其のくは山石布目ありて故に布引山と名づく其下は布もよふ里ありて地より谷を穿ぬハ怪崖高くさかしく累したる陰巖其下は又次なる谷を不通流と云小諸侯の法士麻栲の時ハをへり多々の人其く須加間原より獸物と積りて谷へ進入して取らば以法の方より氷村からて山の南より下る程者甚ハ南に向ひ岩窟此中より造りて希多苦ふ空に當りて寺ハ北に向へり其の並所甚大師甚愛宕の神祠ホも岩窟より造り出り此地両山の巖石崎を狭りたる所ありハ山より今月の影ハてり同麓とてともあはるく杜鵑の地考つちまやく字久夜の麻壁にハ猿の姿ありて其の窟の者ありて衣師も西行法師も麻栲を稱し此地の奇蹟を賞しり

下之条古物

下之条村の両羽の神の社壇の左方古き木像ニ軀あり左ハ貞保親王の像右ハ海國より降化の人船代の像と云はれ此船代といふハ親王の師也平生舟後ハ人多く幽谷餘韻云清和天皇第四ノ子貞保親王館于洛陽滋野井一旦患盲因疾温泉而來信濃居海野而薨矣後亂相接而城海野故氏海野而姓滋野往古滋野氏望月在城の時近辺七郷の領主として左衛門督重義其子重隆の石碑山部の津金寺の陰山あり大なる五掃の面梵文ありて建仁永久の年号あり近年又大碑を造り其事を記を其略と曰

望月氏出於滋野善淵王王乃清和帝皇子二品式部卿貞保親王之孫也王六世之孫重道有子三人一曰廣道居海野二曰廣重居望月三曰道真居根津各以其封為氏是稱滋野三家世為信列之臣族矣廣重玄孫重義屬鎌倉右大将麾下

貞保親 王之木像

按和漢三才圖會所謂道服之像也道服之名見續日本記

漿束細抄云其製與直裰

同本出於僧衣似尋常浮

屠黑衣而背不加月形者也冬

則用閃緞七絲緞夏則用紗

其色不定大臣至極襲着之

被為帽子呼曰烏帽子道服

又瓦礫雜考有道服之

異說

原來刻造ノミニ粉跡ナシ風濕ニ晒テ

灰白色也百年以前迄ハ冠着テ有シト云

傳レモ冠ハ相當セサル也今髻ノミアリ

長二尺五寸



渤海國歸化人船代之木像

聖武天皇神龜五年渤海國使來貢

此高麗部類也元年高麗為新羅

所滅殘黨歸渤海國

光仁嵯峨仁明清和宇多

醍醐之朝不絕來貢

五代史卷七十四夷附錄

第三曰渤海本號靺鞨高

麗之別種也此語據疑

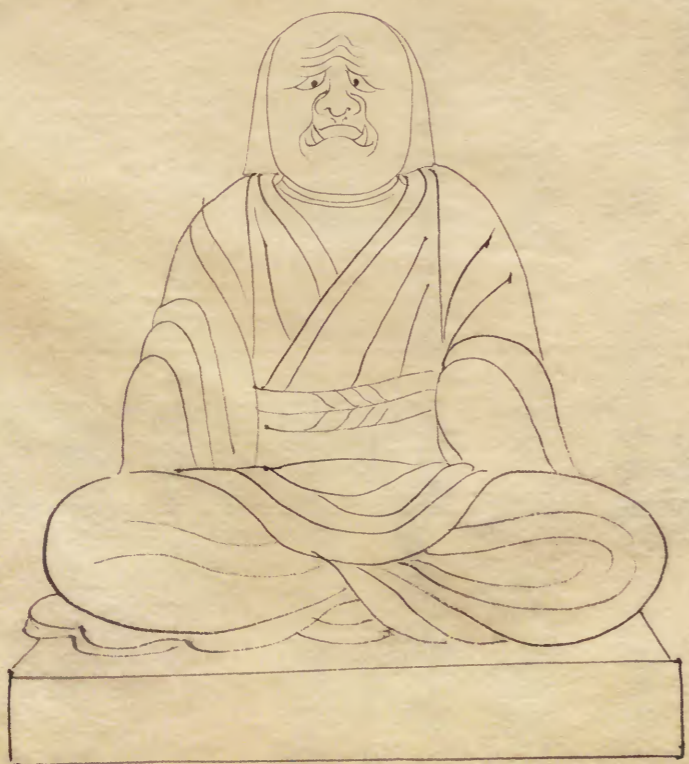
ラクハ渤海靺鞨轉語ナリ

陸奥國多賀城所謂去

靺鞨國界三千里トアルモノ

考證ニソナフヘシ今ノ里數ニラ五百里ナリ

長二尺



口ノ左右ニ牙ヲアラハス兩軀トモニ
年ハハキナマリ離レテナシ

或書云小縣郡矢沢ハ新田義貞ニ屬ス觀應貞治
 頃矢沢ハ即住海野ノ分流也矢沢右馬介教滿永享
 年中緋城合戦ニ出陣小縣郡内百六十貫領云々



此所ヨリ上破損ス

元祖	神前	軍中之	祈念社	海野	西家氏	三月廿八日
敬白				根津氏	兵米石	癸酉歲
				追而		時正慶二

祈念申
 又云神寺

久代下之系も望月氏の系地にて兩村の神祠・別宮原の宮ハ八葉の神とて望月
 氏より先祖貞保親王を祭る所なり慶長中甲斐のゆふ神祠尖塔ハ今ハ兩村の
 神像といハ本祠の社壇ハあると跡ハ形もりの石祠と雖も又本祠の後背光石の
 下ニ苔のしる古石半ハ土中埋れたるを平塚出でたるに祠の如ク石枕の
 如し其状甚ク古種多ク柱石の三方に松歩松と言形ハ一方ハ鶴龜の形
 向をんに見えなり石の三面ハ彫りあり元祖神希とあり正慶の年号あり此
 像もも以希の物なり

墓 闕

中居の里の三丁より北往來の道の西小諏方の森あり乃より東ハ地少りて往間
 長三間より水端有餘一尺許遠ハ文政四年庚申四月十日の以夜よ入て里人甚
 地を通り水邊を路りてハ竊ひ見りまきの墓集りて闕形状あり

元慶二年 飯佐のより三代実録より言ふに 世に登山を執中しやくちゆうナキ
日也の人多し何方より登るも五里程あり故に中ふ一歩とありと山峯に雪の
深積り外うへの山もよく春ふけり解きも又通しきく雪の飯を盛るも
これハ飯盛山とも云ふ 巔ハ渾巖石を松一面延回し根も末もさき、如葉ハ
形も似たり俗に延松と云此巖石の間多ありて極むなむく出づ松を登山の人
よりあり加賀の白山に雷多しと云ふ似たり雷多ハ白山に雷と云出ありて水陸のめく
件の多ありて彼處を食ふ故に雷多と稱と云大さ松の多く松も又松ふ松なる
一説に松の岳多し岳もありと岩多しと云

一説に松の本はふかき山に生ずるも松多しと云ふは松の多しと云ふは 後鳥羽院

あまれり、浅のまゝ家に生ずるも松多しと云ふは松の多しと云ふは 家 隆

一説に大明一統志に載し、と云ふの松多しと云ふは古本ハ松多しと云ふは 松多しと云ふは

本ハ鶴つる難がたと云ふ、このまゝのみを松と云ふ故に松難と名つけたる、されハ
和歌も松を海ありて生ずるも松多しと云ふは、又一ハ鶴鳥と云ふ 鶴字ハ
伊藤長胤、記と題せ、印行の西あり、珠山のまにありの差あり、この山に
多ハ雄おとこのむら黒色くろいろ、小白斑あり、碁石難がまハ仙せんも、崎ハ黄鳴わうめう難がたハ
むねのち黒く白斑あり、足ハ趾あしのさりきと云ふ、雛ハ鳩はとのこゝ、松に
実松のみを松と云ふ、又此山ハ雷鉄ありて住む故に雷高と云
あり、其状小犬の如く毛ハ貉いぬハおとて眼の回り黒くあり、まゝつら細く
下唇短く尾も短し、踏ハはるく、山足の足北と云ふ、足甲五ホありて
背の如く毛ハ穴を穿て土中に入る故に千年せんねん巖いわとも云ふ、常山ハ
軟弱えんじやくなり、人ハ神かみなり、雨ふくんと云ふときハ猛まうく、常山と云ふ山
中陣頭ちゆうじゆう雨降んと云ふときハ此ハ岩より飛り起て雲に入ると、雲のやと云



雷鳥
雷鳥ハ古園ヲ園王カシ他鳥社一ハ侍向侍ハ
不分明成地ハ侍兵大礼画ニシテ並ニ並ニ
紅紫ノニニ在ル

雷獸



雷獸ハ近年又其のまじり改メハ
本画の如く其の毛色ハ非ニ

延松の中を踏む南へももみ五丁よりにて橋上より西へて地や多くて橋の
 中を異味や紐も吉野より此れ風情なるを言ふ三丁より下へてなる藤本
 とする是等も中忍より花は陰母の美由れを水牛舟より茶碗の
 下向ふ如く稍或るはゆりた花の外なる人もやし山中の甘露梅と云ふ有
 葉ハ黄楊の如くして大山より大なるハ実白く小なるハ赤一採て嘗れハ味ハ梅の如し
 不老艸ハ常世草ともく語妻と治し瘧疫ともく檀拵ハ杖より中凡瘧癖
 の病を避ける見れを佩を瘧癖の煩をさそくとも其外異子まし藥品ハ黄蓮
 人參チク中チクも柴胡ハ絶チク百チク多チク一チク年チク種チク尾チク村チクのチク医チク生チク宮チク原チク某チク採チク藥チク亦チク登チクりチクてチク又チク出チク採チクりチク
 て試チクすチクハ功チク能チク他チクハ傳チクれチクりチク因チク之チク京チク都チクのチク物チク産チク亦チク不チク堅チク定チクをチク請チクにチク海チク内チク牙チク一チク亦チクとチク賞チクをチク
 住チク古チクりチク柴チク胡チクハチク漢チク酒チク々チク銀チク丹チクのチク産チクをチク銀チク柴チク胡チクとチク最チク上チクとチクまチクすチクともチク得チクるチクハチク昔チク也チク
 故チク々チク也チク船チク末チクのチク物チクありチク和チク産チクもチク二チク種チクありチク少チク柴チク胡チクハチク大チク不チク別チクありチク

丁小字の里人異名多しと云社地を安置一注連と申て神の如くも煩きをば使はく
てらる者甲乙の市の如しや、（中略）城の物と云れり

虚空藏山

塩尻のたに虚空藏堂あり別當東福寺山の半腰小又一堂あり院頂を奥の院と
云へとも堂ハるし只一株の魚名木あり幹ハ椀の如く葉の芽出づ時ハ藤の如し
（柱の支小 蔓出く）
紅蓮の如き英一ツとしはふ歳年と
（又ハ山ハ春花チノ葉ハ毛良の如く花ハ鳥頭ハ似たり）
任中朝鮮の苗集てより今諸所をまき此れもハ山ハ因り又埴科郡の埴田
岩跡あり天文廿三年甲申武田取り此岩を磐石多田三（後ハ岩跡）と在番として
置りや或夜風雨烈しく物音影りり此ハ庭ハ出くも何者も来り
三八ハ警をつつと引揚人とせし所を刀を挿し其手を斬て落し其物ハ何方と
もあけ行方不知失ふたり彼手ハ大なる警の足の如くある物ありと云
（按是警りて 今も其處ハ大警）

有と云悉拵き水晶山ハ能多名と云岩有若百丈削立也
中腹の松木ノ葉と化して葉ハ大なり

画人嗜地

享保の頃首房少村ハ五郎重つといふ大工や埴中の質宅所理の時工匠の技命と云れ
某日休日の暇同僚と木枕と挑牽て相戯る其時多し相違日枕と大杖と
互セハ人ハこれ踏り一人ハ其首を對しこれ牽り優劣法せん其力と極てこれ
を牽ハ踏者皆横に倒枕を踏り手あり是ハ工ハ密ハ謀て釘を枕と大杖ハ
亦付ありたり）（法）人打て其臂北力を極を又一日休暇 秘ハ百間整ハ浴ハ暑を避
くみら浴ハ浴ハ浴ハ出没して戯る忽此蛇有纏て腰脚と申事 是ハ其力と云れ
赤室子刀又あり故ハ蛇蛇の首を抱齒を以て首を啖断整水盤溢て紅あり工匠
号怨怒ハ極をよしくも惆々更ハ術争り頃ありて左ハ蛇の首を握て浮出右ハ
もて 遊名ハ少言顔色帯の如し人皆其勇猛と感せり其時 埴田も其勇と

賞しむひて賜もの有るも其く其く齒と鳴きと僻と多くて人と應為談話の者
も齒を落せしとて其年より十七年と種く死せりと云

或里より山に入蛭蛇と見て近寄りて病伏せり死する者あり其を命に
して蛭蛇の首を嚙生る所を生一ハ此の強勇なりと人々や之を讃歎す

獅子踊

上田の獅子踊ハ古傳て云宜此地を築の時今古殿れハ此踊を以て留る証の
柄を入地圖を以し其の遠く恒伝と云今もいふて毎年祇園會々常由房
山の両村より此地内の廣庭を踊るなり其狀先烏帽子に天狗の假面
を以り大刀を佩徑五尺斗の國旗を拵るもの一人其を祿宣と云次ハ獅子之狀
より背より黒き鷄の尾を以り其を以り腰に五毛の幣帛を挟み其の
小圓盤を拵る其鷄の尾數多し此狀亦其物を戴き眼と鼻より假面狀

かゝる者 目と鼻を糸のてつりて後をつけて其の又人中のあまひりて口を
くもりし昔ハ泥貝の穴を以て鼻を造り丹土を以り六人より証牒本
を拵れて十人各り其の裁つけときり外ハ花笠を以りひんまり拵るもの
數あり其を以り其と云又編笠を以り大刀を以り青布ハ五毛の紐舟を以り
を拵るもの其を以り其と云

感馬

孝子ハ國中ハ許多有る儀其ありあり者ハ孝義録ハ出又其れもあつた
領の内ハ封内孝氏傳一卷あり此傳ハ出孝子二十人あり又更級郡ハ里村の岩
女ハ母ハ孝と云て生涯の苦身美談少く其之も中名ありて儀其ありあり
坂本より菅城氏の母より子岩女ハ傳を著し其孝子とりて其ハ牧奉の傳あり
これハあり又異行傳一卷有る善行の者ハ人と裁其一ハ奈良本村ハ源房と云
者あり其子を以り其の稱を父子人と云 朴直敦厚なり其内和氣ハ御里

暲く近郷の者つひに争言あつたを以て度大小とあり村長の命を以て畏敬して守て
 敢て背く嘗て村長を請て曰毎年秋の租七月の初金を以て納し村長と
 故を以て曰公税納れぬ田も吾有らば又田村を以てしる者其田を佃す租
 二石一斗刈獲てまことに半あり此米を田より轉る田に磨磨の無きを問ひ曰
 私の債を償ふれ新米先祖を薦るる人も多し人取く嘗て心して農師の
 隙にハ新と馬を駄て上田へ行てひきく米位十里程と斂てあふふるを牽くも
 物を犯んやを慮して多し枵を以てしる人も多し人取く嘗て心して農師の
 ときハ抵ふる水田にこころれとふぬ寝る所ハ既に行馬を向ひて懸掛し
 叮嚀親知人と語り如し或とき驛了を畜馬之米勝張て控制を受て其
 多倍父子水をつく二年と彈丸尾を掉て常の馬は異なりは後水と人夢
 橋驚るの故に後よりしる事あり神佛を崇信して朝夕も礼もせぬも先と

以て農度を妨る事あり文化四年六月鎮立し米を賜て其志を賞し

南唐の陳氏十世同居して宗族七百口毎食廣席を設長幼次を以て坐て
 昔も食を畜六百餘あり一宰を共して食上一大至りハ諸大水より為る食
 んや、こハ至誠大を感ひるや今水長を信父ハ至誠大を感ふと謂つ事し

魚骨石

日向小泉の大日堂ハ相傳延暦年中
 坂上の田村丸の建立あり天照山海堂と
 号別堂ハ真言密教山高仙寺此地ハ
 蛇河原よりあり山沢の奥あり山海
 堂の麓二丁中をありれ村の中を移り



別所
温泉

男神岳

水沢

松本三千

撒吹滝

相澤川

イシ湯

コカ湯

カイト湯

八角塔

守樂寺

女神岳

大湯

イケニ湯

北向堂

帷波ツカ

モラシ湯

西行寺

常樂寺



鳴巢

下の郷の色(色)ガニボウと云地の奥、杉山の中、流の巢と云所あり、一響(響)聳(聳)て其土色を
 白く五色(色)間色(間色)と云所の山石を難(難)く出(出)る草木生育(生育)せし陰峻(陰峻)なりを托(托)るの外生
 花(花)等(等)も有り、昔(昔)女(女)の流(流)の巢(巢)ひりり名(名)つくと云、伊(伊)風(風)雨(雨)毎(毎)に土(土)石(石)流(流)せ
 流(流)る山の形(形)變(變)易(易)す、故(故)に此(此)處(處)より谷(谷)の古(古)流(流)れ、石(石)の如(如)く皆(皆)石(石)なり、肌(肌)潤(潤)滑(滑)な
 して光彩(光彩)あり、玉(玉)の如(如)く中(中)も小(小)くして白色(白色)なる、其(其)は石(石)の舍利(舍利)石(石)なり、其(其)赤(赤)
 色(色)を帯(帯)するハ、瑪瑙(瑪瑙)也(也)又(又)清潔(清潔)透徹(透徹)して水晶(水晶)也(也)と云、其(其)有(有)何(何)色(色)小(小)くして大
 小(小)も寸(寸)又(又)先(先)ハ稀(稀)なり、
筑(筑)前(前)島(島)井(井)の流(流)の石(石)多(多)く其(其)を賣(賣)ふ
 信(信)中(中)の崑(崑)山(山)合(合)浦(浦)もふへ

佛岩

大門崎(大門崎)ハ半里(半里)下(下)りて赤(赤)佛(佛)岩(岩)と云、有(有)岩(岩)名(名)甚(甚)奇(奇)く並(並)し、文(文)政(政)十(十)年(年)有(有)月の以(以)岩
 草(草)と云、其(其)の一(一)ツツの岩(岩)也(也)了(了)る、凡(凡)九(九)五(五)條(條)の如(如)き石(石)あり、有(有)里(里)ハ流(流)り、其(其)ハ其(其)地(地)ハ

あり、其(其)何(何)方(方)よりと云、其(其)もあ、其(其)も十(十)五(五)條(條)許(許)登(登)りて
 平(平)岩(岩)あり、こゝより又(又)十(十)間(間)許(許)の木(木)こゝを立(立)掛(掛)
 且(且)其(其)を往(往)び、頂(頂)ハ其(其)れハ上(上)平(平)ナ
 一(一)て笠(笠)石(石)臺(臺)石(石)あり、採(採)重(重)ねたり
 と云、其(其)の工(工)を以(以)て其(其)所(所)ニ立(立)ん
 西(西)肥(肥)前(前)大(大)守(守)淨(淨)阿(阿)弥(弥)陀(陀)
 北(北)息(息)女(女)日(日)光(光)峯(峯)宮(宮)
 東(東)近(近)江(江)禪(禪)閣(閣)
 南(南)



年号 應長第一曆
 其餘文字減
 文政十二年造
 五百二十年



柳草

和田嶺^{しづなげ}に柳草と^{しづなげ}り草^{くさ}なり葉ハ柳ノ如ク莖ノ高々四五尺肥々ハ六七尺數莖直立して
 莖ノ末^{くさうら}に花を著^{あは}れ花ハ五瓣^{ごはん}も梅花ノ如ク淡紅紫色^{たんこうしよく}復^{また}末^{すえ}より^{さき}発^は秋初^{あきのはじめ}の
 初^{はつ}の幹^みより^は花^{はな}を^は後^{のち}より^は枝^{えだ}を生^は枝^{えだ}毎^{ごと}に^は高^{たか}を^さく^も花^{はな}美^み觀^{くわん}群^{ぐん}を^な冠^{かん}と^り花^{はな}の
 後^{のち}實^みを^は葉^は角^{かく}の^{かど}の^{かど}如^{ごと}く^は此^こ州^{しゅう}の^こ西^{にし}の^こ下^{した}品^{しん}あり^まの^は諸^{しよ}國^{こく}に^あり^ます
 如此^{かく}大^{おほ}き^な花^{はな}の^は美^み觀^{くわん}なる^は故^ゆに^は都^{みやこ}下^{した}の
 花^{はな}戸^と本^{ほん}州^{しゅう}に^あり^ます^は根^ねを^は求^{もと}め^りま^す
 欲^ほし^ば此^こ花^{はな}和^わ田^{でん}嶺^{りやう}の^はま^に限^{かぎ}ら^れば
 諸^{しよ}山^{さん}の^はま^にあり

一説ニ六救荒本草に出^い出^でる
 柳葉菜^{りゅうえさい}の一種^{いっしゆ}なりと^いふ



明治八年十一月上浣中卯元起校

